

世界三大旅行家たちの旅と私の旅(04・09・18)

——シルクロードを中心に——

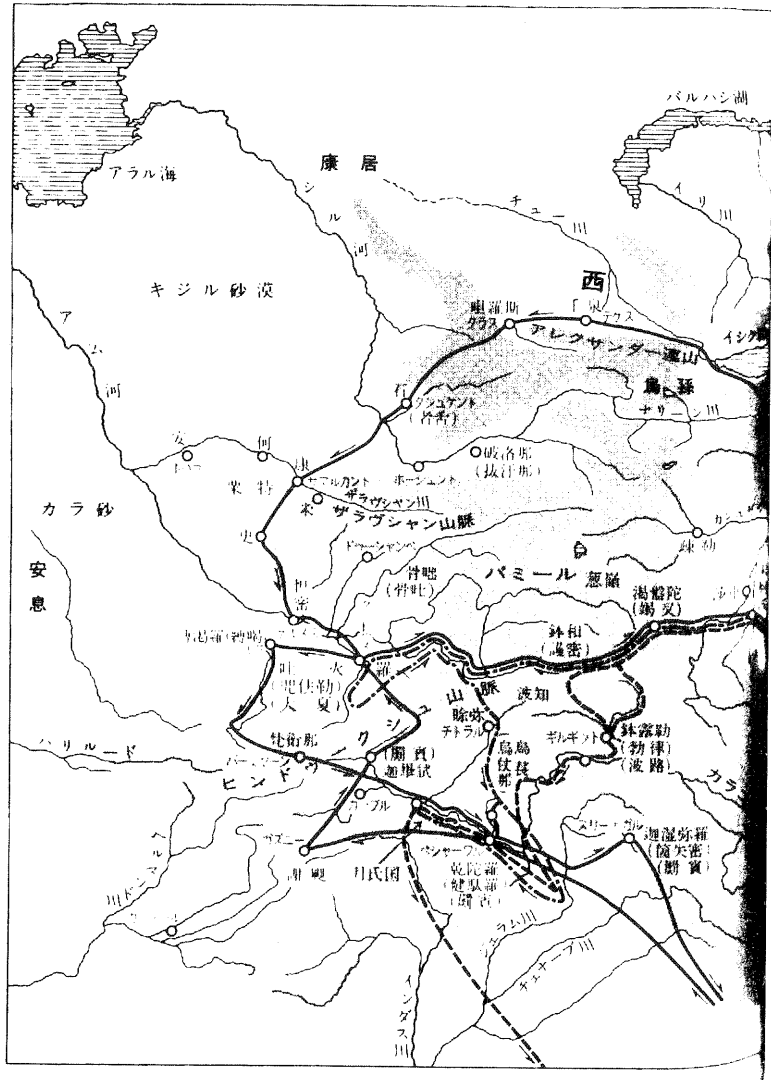
中西

亨(昭和20・理乙)

私は戦時中の昭和一八年に三高へ入学しました。すぐ校歌「紅萌ゆる」を教わりましたがその歌詞に「コンロンの高嶺のこなたゴビの原……」というのがあつて日本の校歌にどうしてコンロンの話がでくるのか不思議な気がしたものです。たぶん遠いあこがれの地としてその名がでたのでしょう。そしてこの春に三高の同窓会でなにか講演をとたのまれ、さてなんの話をしようかと考えた時コンロンの嶺と関係が深いシルクロードを旅した人達の話でもしようと考えました。さて少し構想をねっているうちに、あの地を私はかなりまわったつもりでしたが、西域南道の南に連なるコンロン山脈、その北の要地で玉(ぎよく)で有名なホータン、更に西の要衝カシュガルへ行っていないかったので、今年平成一六年六月この地方を旅してコンロンの山並みを眺めてきました。そしてこれまでの七〇回余の旅の経験も加えてシルクロードの旅人たちのお話をすることにしました。

古来、中世末までをとつてもこの地を旅した旅人は限りなく多いわけですが、いくらす

入竺求法僧のルート I



ごい旅をしても記録を残してくれなければ、その業績は伝わりません。それで大きな旅をし、すばらしい記録を残してくれた人として我々は、玄奘、マルコポーロ、イブンバトゥータの三人を「世界の三大旅行家」としてしますので、私もこの三人の足跡をたどることとしました。しかし三人以外にも多くの大旅行家が輩出していますので、中世末までの大旅行家計一二人をとりあげ、上の三人はかなり詳しくあと九人は少しふれることにして、年代順に中世の終り十四世紀までの旅人の足跡を皆さんと共にたずねてゆくことと致しましょう。おくばりした栞の地図をみながきいて頂きたく存じます。(1)……(12)は栞の番号)

(1) 周の穆王

中国の古代三王朝の一つ周の五代目の王様で、西暦紀元前一〇〇一〜九四七の在位といえますから、なんと三〇〇〇年も前の話です。キリストはもちろん釈迦や孔子よりもずっと前の話で、秦・漢の頃には既に忘れ去られていたようです。三世紀の終り、西晋の咸寧五年(二七九)河南省汲県で戦国時代魏の襄王(紀元前三一八〜二九六)の墓から多量の竹簡が出土、この中に「穆天子伝」があり周の穆王の事蹟が記されていましたがその文字は漢字以前の篆書でしたから、晋の武帝(二六五〜二九〇)は荀勗(じゅんきょく)に命

じて整理編集を行われました。この書は六巻からなり、その第四巻に穆王の一三年から一四年にかけての西域巡狩のことが日記風に記されていました。これは西域地方最古の旅行記で「コンロンの丘」もでており、西王母の国(?)もでてきます。地名が多くでてきますが、現在の地名との比定は困難ですが、王たちは中央アジアのイシク・クルあたりまで行ったようです。この本ことは私も近年知った次第で、ほとんどのシルクロードの本には記されていません。

(2) 張騫

次は張騫(生年不明、紀元前一・四年歿)です。史記の「大宛国列伝」にでてくる人で、陝西省漢中の人、前漢の武帝の命を受けて西域諸国を歴訪して、はじめてこの地方の実情がわかりました。彼は往路は天山南路、帰りは西域南道を通り、大宛・康居・大月氏・大夏などを訪れています。その旅行は困難をきわめ捕虜になったり脱走したりしており、史記により詳しいことがわかります。後に將軍として烏孫国へ行き平定しております。

(3) 法顯

次は有名な僧法顯です。佛教は後漢の時代になって中国へ伝わります。しかし完全な形



伝法僧図（敦煌将来） 天理図書館蔵

出発したのがなんと六五才の時というのは驚きです。西暦三九九年の春、長安を出発。この旅のことは「仏国記（法顕伝）」に記されているのですが、十五年に及ぶ大旅行をたった九五〇〇字ですませているので細かいコースのことはわかりません。出発の時四人の僧と従者で出発、敦煌をへて玉門関からゴビ砂漠に入ります。このコース困難をきわめ、「空に一羽の鳥もみえず地を走る一匹の獣もない。……行人の死骸の白骨を道しるべとするのみ……」。この文章はこの地方の旅のつらさを示す文章として有名なのでご存じの

で伝わらないので、インドへ行って原典でたしかめたいという求法僧が出現します。法顕はその一人で、玄奘と並び仏典請来に功績のあつた僧で、玄奘より三〇〇年も前の人ですのに玄奘ほど知られていないのは、その資料が少いためでしょう。彼は山西省武陽の人ですが、インドをめざして

方であろうと思います。やつと樓蘭につき、あとホータンへ着きますがその行程はよくわかりません。ホータンの町は当時大いに栄え「ことごとく佛法を奉じ法楽を相樂しむ」と記しています。ホータンからパミル高原を越えガンダーラのペシャワルへ四〇二年到着。アフガニスタンをまわつてインドに入り、マガダ国の首都パータリプトラーについたのが四〇五年、ここで三年間勉強をします。更に別の所で二年、計インドに六年滞在しました。あとセイロンへ、そして海路でインドネシアを経由、二回嵐に会いましたが無事中国へ戻ることができました。が、なんと着いたのは山東半島の青州でございました。義熙八年（四一二）のことで、彼は七九才になっており、最後まで同行した僧は一人もおらなかったようです。彼はこのあと翌年（四一三）建康（今の南京、東晋の都）に入り、あの短い旅行記「佛国記」をかき、持帰った佛典の翻譯にかかりましたが、その半ばで八六才ぐらいで歿くなったようです。正確な生・歿年共に不明となっております。彼こそは最初に中央アジアをへてインドへゆき帰ってきた大旅行家でした。

（4） 宋雲と恵生

共に生歿年不詳。旅行以外のことは不明です。法顯が帰国して百年余り、世は北魏の時代になっていましたが、その神龜元年（五一八）胡太后の命をうけて宋雲と恵生の一行が

北魏の都洛陽を出発して西に向いました。二人のうち惠生は僧侶でしたが、宋雲は役人でした。この二人の旅行記は「宋雲行記」として伝えられています。これは「洛陽伽藍記」の著者楊衒之が今は亡失した「惠生行記」他二冊からまとめたようです。さてこの「宋雲行記」によりますと、洛陽を立ち珍しく吐谷渾国（今の青海省）をへて西域南道を西へ、ホータンをへてパミル高原へ。このあと宋雲はエフタルへ寄っています。そのウジャーナ国での王との問答を記しています。ガンダーラなどにもよって正光三年（五二二）頃帰国しますが、二人が一緒に帰ったか別かはよくわかりません。彼等の資料に宋雲が官人で外交官だったらしく政治的な部分が貴重です。

（5）玄奘

宋雲等が中国へ戻ってまた百年程後に西域からインドへ求法の旅にでた僧がありました。貞観元年（六二七）のことで、これこそ求法者にして大旅行家我等の玄奘三蔵です。彼は河南省の偃師県の人です。この地は洛陽の傍で、私も近くまで訪れています。その当時は全く受入態勢もなかったのですが、今は観光地として訪れる人が多いとか……。一〇歳の時父を失い僧籍にあった兄をたよって長安へゆき、僧籍を得ます。その後長安での混乱を



玄奘三藏 東京国立博物館蔵

避け四川の地へ兄のすすめでおもむきますが、この数年に及ぶ旅が彼の求法大旅行以外の唯一の旅となったようです。長安へ戻り佛典の研究を続けますが、当時の中国でみられる佛典には疑問点が多く、それを解決するにはインドへ行

かざるを得ないという考えになり、当局にその許可を申請しますが、当時唐は建国後日浅く国外への旅を禁止しておりまして許されず、やむを得ず単身出国、これが貞観元年（六二七）八月とされていますが異説もあります。この旅は官憲の目をくぐつての旅でもあり苦しい旅でしたがようやくハミに着き更にすすんで高昌国に着きます。ここの王麴文泰の大歓迎をうけ、この地にとどまるようすすめられました。が帰路立寄ることを約して西へ。亀茲国（クチャ）でも大歓迎をうけます。当時まだ二〇代の青年僧がはじめての国へ行つて、あれだけの歓迎を各地で受けたのは余程話がうまかったのか、或は人間的魅力があったのでしょうか。彼は更に西へ天山南路をすすみ峠をこえて中央アジア、今のキルギス

の地へ、そのイシツク・クル湖畔につきます。この中央アジアの美しい湖へは私も先年参り、大統領専用船をだしてもらつて湖上觀光をしました。彼はその西岸を通り更に西へ、この近くで西突厥の大王と会見したことが知られています。更に西ヘタシケント（石国）、サマルカンド（康国）と進みます。この二つの町は今もこの地方の中心都市で私も訪れています。当時はゾロアスター教が栄えていたようですが、今は完全にイスラームの町です。更に南進してパミルを越えバルフやバミアンに寄ります。後者は先年タリバンにより破壊された世界一の大石佛のある所で、お顔の部分も残っていた時代にここへ来て記録を残した唯一の人ということになります。それよりヒンズークシュの山脈をこえペシャワルへ。それからカシミールを経てインドへ。当時インドに君臨していたハルシア大王（戒日王）の都、曲女城（カノージュ）に着いたのは六三〇年のこととされています。このあと彼は釈迦の聖蹟めぐりをしています。私も先年お参りしましたが、この佛蹟めぐりができたことは佛教徒にとっては大きな喜びです。このあとナーランダ寺に入つて研鑽につとめます。この地今は完全な廢墟になっていましたが、壮大なスケールでした。ナーランダで学ぶこと三年、このあと各地を遍歴します。彼はインドに居る間ハルシア大王の絶大な庇護を受けましたが、いよいよ帰国する玄奘のため、王は七五日間に及ぶ大式典（大施餓鬼）を行なわれます。アッサム地方の王クマール王をはじめ各地の王・僧侶ら数千の人が集つたと

伝えています。

六四一年、玄奘は多くの人に別れをつけて帰路につきます。多くの荷物があるので南まわりをしたかったのですが高昌王との約束があり、北へ陸路をたどります。帰りもパミルは苦勞の連続で、請来品もかなり失つてしまします。やっとクンドウズへ着いた時、高昌国が唐に滅され王は死去の報に接し、カシュガルから西域南路を東へホータンに向います。ここで唐の太宗皇帝に無断出国を詫び帰国の許可を願います。その返事を待つ間に失われた経卷など補います。皇帝から帰国を歓迎するとの返事がきて、ここからは軍に守られ平穩な旅となり楼蘭をへて玉門関へ戻ります。時に六四四年、彼は四三才になっていて、一七年にも及ぶ旅でした。翌年洛陽で皇帝に拝謁そして「大唐西域記」一二卷を献呈しております。これは彼の訪れた国々の他に聞いただけの国も含め一三八ヶ国の事が記され、不滅の資料となっています。このあと彼は請来した佛典の翻訳に後半生を捧げ、その量は七五部一三三五卷に達したといえます。今も西安にそびえる大雁塔はもと佛典の経庫として彼が建てたとされています。麟徳元年（六六四）六三歳で歿くなりました。彼の墓は西安南部の興教寺にあり方型五重磚塔で、私ははじめて中国を訪れた時にお参りしてきました。彼の伝記「大慈恩寺三蔵法師伝」は弟子の慧立と彦惊が編集したもので、大旅行の記録とその後の師の事蹟をしるしています。

玄奘がインドを去って帰国するまでの間にかのハルシア大王逝去、インドは分裂状況になり佛教は東インドを除き姿を消してしまっています。そして西からはイスラームの勢力がおしよせてきます。一方中国では漢民族が最も栄えた時代で唐朝は十世紀はじめまで三〇〇年にわたって繁栄します。その中期玄宗の時代にはあとで少しふれる高仙芝（七五七歿）の遠征などがあります。

（6） 高居誨

しかしその唐王朝も九〇七年滅亡。数十年の間に五つの王朝が交替した五代の時代となります。この五代のうち三番目のペルシア系の王朝後晉の高祖石敬瑭の命でホータンへ使いたのが高居誨で、その時の旅行記が「使于闐記」です。「于闐」はいうまでもなくホータンで私の話にたびたび出てくる西域南道のオアシス国家で、漢代から十一世紀まで千余年も続いたようです。天福三年（九三八）そのホータンの王李聖天からの使いがやってきて自国の産物を献上してきましたので、高祖は王を「大宝于闐王」に封じ、使をおくらせることにしました。その一行の判官として高居誨が加わっており、彼はその時の旅行記を残しました。同じ九三八年冬、一行は汴京を出発、河西回廊を西へ……。その間の状況をかなり記しています。それよりトルファン、コルラを経て西域南道を進み天福五年（九

四〇）ホータンに入つてその王李聖天に会っています。この王で思い出すのは敦煌（第九窟）の壁画で中国風の正装して立つ王の姿が印象的でした。他に当時の文書がペリオ請来文書にあるようです。これより半世紀後にはイスラーム系カラハン朝の侵略をうけ、長く栄えたこの国も壊滅してしまいます。その直前の姿を記録したこの旅行記は貴重な資料と申せましょう。一行は使命をおえて同じコースで都へ戻ります。天福七年（九四二）のことでした。彼のその後の消息は不明です。彼の旅行記は「于闐行程録」一卷として残されましたが、現在伝わらず、その一部が「新五代史」ほかに収録され今日に伝わりました。

（一） カルピニ

五代のあとは宋の時代となります。宋は文化面で大きい足跡を残しましたが軍事力は弱く中国北部は遼・金・元の支配下に入ります。元即ちモンゴルはチンギスハーン（一二二七歿）によつて急に発展した空前の大帝国ですが、その領土がヨーロッパにも及んだので、東アジアからヨーロッパまで一つの政権下に入つてその地域内の交通が便利となり、ヨーロッパの人々が東アジアにやってくることになります。

まずカルピニですが、先の高居誨が都へ戻った時から百年ほどあとにモンゴルの都にやつてきた人です。彼はイタリア中部プラノの人で、フランシスコ教団の修道士でしたが法

王インノセント四世からモンゴルへ行くよう命令をうけます。その数年前の一二四一年、かのリーグニッツの戦いでヨーロッパ連合軍は拔都の率いるモンゴル軍に大敗しましたが、太宗の崩御のため、軍を返したばかりです。その後のモンゴルの様子を知るための派遣でしょう。彼は一二四五年リヨンを出発、六五才の時でした。リヨンからドイツを経て敗戦の地リーグニッツ、クラコフ、キエフを経て拔都の宮廷のあったサライへ、そしてバルハシ湖の南を通り、カラコルムでモンゴル三代目の大ハーン定宗グユクに拝謁して親書をわたします。四ヶ月の後返書を受けましたが、かなり高圧的なものだったようです。返書はモンゴル語の他にペルシア語、ラテン語と三通り書かれたようですが一九二〇年のペルシア語のものが発見されたそうです。彼は返書を受取って、一二四六年同じコースで帰国します。

(8) ルブルク

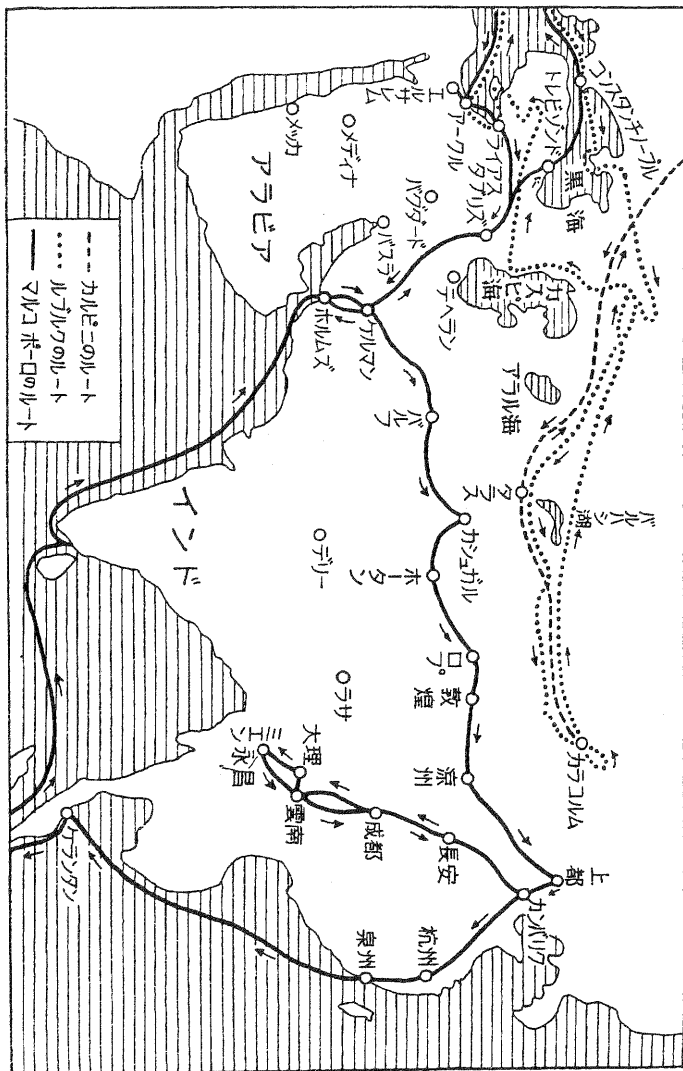
そのすぐあと今度はフランス王ルイ九世の個人的使節としてルブルクが一二五三年コンスタンチノブルを出発、カルピニとほぼ同じコースを経てカラコルムに達し、時の大ハーン四代目の憲宗モンクに拝謁、王の宸書をわたして二ヶ月滞在、帰路もほぼ同じコースで一二五五年帰国しました。この二人は使節としての使命はかなわなかったようですが共に

旅行記を残し、当時の北東ヨーロッパからモンゴルへの詳しい実情をヨーロッパに伝えた功績は大きいと言えましょう。

(9) マルコポーロ

次はいよいよマルコポーロの登場です。彼は旅行家として最もよく知られている人物で一二五四年の生れ、ベネチアの人ということになっています。しかし私がクロアチア国へ行った時、アドリア海に浮ぶ小島コルチュラが彼の生地ときかされ、島には彼の住居だったという建物、そして敗戦後とじこめられた古塔というのも見てきました。当時この島はベネチア領でしたから、ここの生れでもベネチア生れといえますが、祖父の代からベネチアの住人ともいわれています。彼の父ニコロの兄アンドレアはコンスタンチノブルに住んで広く貿易を営んでいましたが、一二五五年弟ニコロとマッテオを呼びよせ、この二人は東方へ貿易の旅に出かけます。予定としてはサライあたりが目標と思われませんが戦乱があつて東へ、遂に元の大都までゆき五代目の大ハーンで中国をも支配下においた世祖フビライ汗に会うことができ、好遇をうけて国へ戻ります。一四年の旅でした。帰ってみるとニコロの妻は死に一五才の息子が残されていましたが、これが後の大旅行家マルコポーロでした。二年後二人の兄弟はマルコを伴つてベネチアを出発して元の都へ向います。

マルコポーロ 他のルート



ります。伝統です。アメリカには人間は神様が創ったものというキリスト教を信じて、今日でも進化論を禁止しているという州もあります。

この宗教の大きな役割を考えると、宗教も人間が心を持った以上、あってもなくても可いものではなくて、教育を考える時、充分深く考えねばならぬものであります。

人間に心があり、その身体が発育するに従って心も発育します。それが自由を持っているので、それがどの方向に発育してゆくのか。人間の文化も育ちます。科学技術を始め凡ゆる学問・文化も発展し、一国の科学技術も進歩して行きます。どんどん進んで行き人間は便利になって行きますが、それで可いのか。

私はかつて中国の西北の天山山脈の麓のシルクロード沿いのウルムチに行きましたが、そこの人達は鎧あぶみもつけずに小馬に乗って走っています。平衡感覚が十分あるのです。私達の様に都会に住んで車に乗っている者は、次第々々に平衡感覚が乏しくなっています。目も同じです。夜も明るいところに暮らしていると、視力も弱っていきます。このように科学技術の発達は、私共の本来持つておった能力を低下させております。そればかりか、公害で地球環境を害しています。このことは世界的な問題になっています。このままで行くと地球上の生物が共存出来なくなります。生物の多様性と言われて地球上には極めて多種類の生物が生き、互いに助けあつて生きています。その数は認識されているものだけでも

百数十万種と言われています。共存です。これが出来ないとなると、人類の将来は怪しくなります。

地球温暖化に関する国際会議が一九九七年一二月に京都でありました。京都議定書が出来ましたが米国はまだ批准していません。このほか、この科学・技術の発展については、大切なことがあります。原子爆弾であります。一九三八年にドイツのオットー・ハーンによって原子が分裂する時、大きなエネルギーが放出されることがわかりました。この実験が一九四二年、アメリカのシカゴ大学の地下室でエンリコ・フェルミによって成功し、それは原子爆弾の製作に連なる技術です。人類にとっては実に重大な第一歩です。ここで初めて科学者の責任といったことも言われ、特に初の唯一の被爆国である日本及び日本人にとっては、もっともっと深い意識がなくてはなりません。国をあげての関心がなくてはなりません。これは悪用されると人類の破滅に連なります。

同じ人間の心が生んだ分子生物学の発達は、一九五三年ワトソン (Watson) とクリック (Crick) の遺伝子の化学的構造の発見後、遺伝子組み換え技術が発達すると、クローン人間の可能性も生じます。人間の出生は天の摂理と想ってきたものにとっては大きなショックです。人間の進化の長い道程とその経過を経て、現在のヒトのあることを考えますと、クローンと言うことはやって可いのか。新しい倫理が必要となります。

一三二四年七〇才でベネチアで亡くなったんですけれども、寂しい最期だったようです。ベネチアに彼の墓があるそうです。

(10) コルヴィノ

そのあとイブンバトゥータとの間に二人の旅人、即ちコルヴィノとオドリコがおります。このふたりの旅人はフランチェスコ教団の修道士でこの人たちは東アジアへ行くのに中央アジアのホータンを通っておりません。さっきのマルコポーロが帰ってきたときのようにホルムズまで陸路を行って船に乗っちゃうんです。当時中央アジアのほうはずいぶん荒れていまして、戦乱が多くて通るのが大変で。ちょうどこの頃になると造船技術と航海術が相当地に進歩しまして楽に行けるようになったようです。それで二人とも簡単に南京、北京に着いたと書いています。コルヴィノは修道士で非常に熱心な人で、出かけたときに相当地なお年、たぶん六〇何歳ぐらいだったと思うんですが、とうとうカムバリク今の上都ですが、一三二八年ここで亡くなっています。たいていの人は行つて帰ってきていますが、この人だけは八一歳の生涯を遠い異郷の地で終つた人です。

(11) オドリコ

そのちよつと後でオドリコという人がいましてこの人もイタリアの人ですが、これもほぼ同じようなコースを通過して北京に行っております。彼も船で行っております。この人が非常に変わっているのは、帰りにチベットに寄つてゐるんです。古い時代のチベットの記述は非常に少ないので面白い記録です。オドリコの「東方旅行記」という本は最近日本でも出ております。私も買いましたがまだあまり読めてないんです。これもグリエルモという修道士が書いたもので本人が書いたんじゃないんです。

(12) イブンバトウータ

それから最後に、一二人目がイブン・バトウータです。一三〇四年から一三七七年とちよつと十四世紀を生きた人です。モロッコのタンジールの人です。私もあまりタンジールの事を知らなかったのですが、二回目ヨーロッパに行つたときにスペインのアルヘシラスからジブラルタル海峡を船で渡つたことがあり、その時に乗つた船が「イブン・バトウータ号」といふんです。珍しい名前の船だなと思つてイブン・バトウータとこの関係があるんですかと聞くと、これから行くタンジールという町は彼の生まれたところだということです。タンジールというのはモロッコの一帯北のはしにある古い港町です。

私が行つたのは今から三〇年ほど前になりますが、あそこは物騒だからという事で物騒

な話ばかり聞かされて、一人歩きなんかしたらとんでもない目にあいますよ、カスバの中に入ったら出られませんよと、言われたりしました。だから私は向こうの人の服装で歩いたりしました。そんなタンジールの町の人なんです。イスラームの熱心な信者でして、一九歳のときにメッカへお参りしようという事になって……イスラームの人たちはメッカへの巡礼は義務のひとつなんです。だから一生のうちに少くも一回、多い方がいいのです。が何回もお参りするわけです。彼は一九歳のときに思い立って、あるグループに属してメッカへ出向いていくわけです。行ってみてその旅が非常に面白かった、楽しかったらしいのです。

だからその後三〇年間旅ばかりしていました。お手許に渡しました旅行の地図を見ると、彼以外の六人の人たちはある目的をこめて一つの大旅行をしていたようなんですが、この人はあっちへ行ったりこっちへ行ったりめっちゃいろんなところを歩いています。メッカだけでも一〇回ぐらい行っていると思うんですが一九歳のときから三〇年間、もちろん国へは何度も帰ってるんですが。ここにも書いてあるように一三二五年から一三五五年までの三〇年間に一二万キロも歩いた事になっているんです。チャガタイ国も行ってるし、その王様クルマシリンとも会っているし、ガズニのマームード、この人はアフガニスタンからインドを征服した非常に獐猛な王様で有名な人ですが、このマームードにも会って

いたようです。

それからちよつと面白いのはマルディブへ行っているんです。マルディブはインドの西の方にある避暑地で有名な島国です。私も行きたくなつて行ってきました。マルディブというのは小さい島々からなり、暖冬で海面が上ると国土が消えてしまうといつて助けを求めていたあの国です。彼はその国へ行つてみて、そこで法官つまり司法官をやっていた事もあるようです。メッカにも一〇回も行つてゐる人ですから偉い人になつていまして、イスラム圏ではどこへ行つても天下御免のような存在で、あちらこちら歩いていきます。マルディブのことは特に詳しいです。

インドもちよつと寄つています。バングラデシュの近くも行つてゐるようです。それから中国へも行つたというんですが、中国の事も詳しく書いてあるんです。この前久しぶりに読み直してみんですが、まったく行つていなかったらあれは書けなかったと思うんです。中国の街のことや習慣なんかも書いてゐるんですけども、途中の街と街の間のことなんかはほとんど書いてないんです。だから本当に行つたんじゃないやなくて誰か行つた人の話をそのまま転用したんじゃないかとも考えられます。私の考えでは中国まで行つたかどうかはあやしく、せいぜいザイトンまでは行つたかもしれない、けれど北京までは疑問視しています。

もうひとつ変わっているのは、アラル海の西の方にも行っています。それから非常に珍しいのは、アフリカ、サハラ砂漠の南のニジェール川のほうにも行っているんです。中世のニジェール川の辺りの記録というのはほとんどないんです。もともと彼の記録もあんまりたくさん書いてないし怪しかったという事で、そうたいした事はないんだけど、とにかくサハラやニジェールの事を書いてくれたほとんど唯一の人なんです。それからアフリカ東岸モンバサからザンジバルの方も行っているようです。

もうひとつスペインへも行っています。当時スペインはレコンキスタが完成する前でしてイスラームの国グラナダ王国があった時代なんです。で、セウタから入りアンダルシアを回ってスペインのことはかなり詳しく書いています。イスラーム時代のスペインの事を書いた非常に珍しい記録なんです。というような事で、世界中いろんなところへ行って一生旅をしていました。六〇近くなりましてモロッコへ帰ってきました。その時にマリン朝アブ・イナーンという王様、フェズというところにいた王様ですが、お前はぜひぶん世界中を歩いたそうだからその記録を残せという勅命が出まして、ここに書いてあるイブン・ジュサイという学者に命じて彼の話を書き残させました。ジュサイの整理は一三五六年に終了、この本は普通日本では「三大陸周遊記」という名前で出ておりますが。これは全文ではありません。

イブンバトウィタは晩年法官として平穩な生活をつづけ一三七七年頃、七三才でなくなつたようです。彼の時代までで一応中世の旅は終わるわけです。

ところで、お手元の栞の下に「征服者」というのが書いてありますが、いろんな東西交渉史の本を読んでいますと出てくる旅行者の名前六人を、たまたま抜粋したんですけれども、この人たちを私達は「旅行者」とは見ていないんです。この人たちは「征服者」で、「旅行者」と「征服者」は違うんです。「旅行者」というのは、そこに旅館があり道があるところを通って泊まっていくわけです。「征服者」というのはそんなことは無視してその王様を放り出して自分の領土にしたり虐殺したりして進軍していくわけですから、これは「旅行者」には入らないと私は思っているんです。

それではじめてインドへやってきた「大旅行者」はアレキサンダー大王と普通は言うわけですがアレキサンダーは完全に「征服者」です。マケドニアからインドまでやってきたというのはたいしたことです。これは東西交流の一番の立役者です。次の二人は前漢時代の張騫の時代の將軍で西の西域地方を征服してその地を治めた人たちです。その次の後漢の班超は後漢時代の同じような立場の人です。それからその次の高仙芝は唐の玄宗時代の將軍です。唐の西域経営をやった人です。そしてチングスハーン、この人たちは「旅行者」じゃないわけです。そういうわけで、まだまだたくさんの方がいまして私もどこまで

入れようかなと迷ったわけですが、旅行者としてこの一二人を私流に選んだわけです。その中でも重要と思われる「三大旅行家」を中心にお話してきました。

終りに

ここで皆さんアドリブで考えてほしいんですが、はじめに言いましたように旅行記を残さなければ「旅行家」にならない、という事なんです。まず玄奘三蔵は先に言いましたように本人の書いたのは地理書なんです。「大唐西域記」です。「旅行記」として書いたのはやはりお弟子さんです。だから少しフィクションが入り、間違った部分もできてしまったのです。マルコポーロは、さっきも言いましたようにルステイケロが書いたので、彼は物語作家ですから面白く書いています。だからずいぶん間違ひも多い。今度も旅したときにこの本の東トルキスタンのカシュガルからホータンへ行くところを読んでいたのですがサマルカンドの話が出てくるんです。サマルカンドといえば中央アジアのはずですね。何でそんなところに急にサマルカンドが出てくるのかわからなかった。私が考えましたのはヤルカンドという街が出てくるからヤルカンドとサマルカンドと錯覚を起こしてサマルカンドの話を、ヤルカンドの場所に書き込んだのではないかと思えます。

そういう場所がいたるところにありまして、話が合わないんです。だからよけいに地名

の比定も困難です。ルステイケロの関係では特にそういうところが多かったようです。イブンバトウータの場合は王様のご命令でやったものですから、かなりその点は正確なんです。それでもかなり矛盾した話があったようで、彼の場合は同じところを何度も歩いてるので混乱しています。だからどのときにどこへ寄ったのかよくわからない記述があります。そういうことを考えると、みんな行った人と書いた人はたいてい別なんです。だから両方やるのは難しい事だなあとつくづく思います。

私も実は旅行をずいぶんしまして今回海外から帰ってきた旅が七七回目でした。約一〇〇カ国ほど周ってきましたけれども、とにかく記録を残しておこうと思ってまず文章にしておくことにしました。年もとりましたけれども二・三回は行きたいと思っています。今どこが残っているかといいますと、南極とか北極とかあいうところと、文化史跡のないところは私は行っていませんのでアフリカはほとんど行っていません。アフリカは北の方だけしか行ってません。それからオセアニア州のほうはイースター島みたいな所もありますし、ポナペとかは行きました。南米の方ではインカの遺跡などは行きましたが、南米の方は遺跡としては、そうたいしたことはありません。北米の方はマヤだけはすばらしい遺構がありました。マヤは文字もありましたし時代も古いです。

そういうわけで、南北アメリカ、オセアニア、アフリカはまだまだ行けてないですがア

ジアとヨーロッパに関してはだいたい周ったわけです。この地区で結局行けなかった国はアフガニスタンとイラクです。アフガニスタンはもう少し早く行けばよかったんですが、りぎりで行けませんでした。私が初めて行くのを申請した年に外務省から危険だからやめてくれと言われてやめました。その次の年にはもうロシア軍が侵入してぜんぜんだめでした。それっきりで、国境までは二回ほど行きましたけれども入れずじまいです。

そういうわけで体の方は元気な方でしたから世界中まあま周れ、旅に関してはいい一生だったんじゃないかと思えます。来月はマケドニアの方へ行くつもりをしております。あと二・三回行ってもう終わりたいという事には思っています。

時間が参りました。私の話はこれで終わります。

〔質疑〕省略

注 講演の記録のほうですが、前半はテープが不良で再生できず、改めて書きなおしました。後半はテープからの再生によっています。少し書きかえた所もあり、全部にわたり見出し（ゴチック体）をつけました。

（中西 記）